

◇江戸遺跡研究会第77回例会は、2000年9月27日(水)午後6時30分より江戸東京博◇  
◇物館学習室にて行われ、小川望・両角まり氏より「武蔵村山市田口窯について」◇  
◇についての発表をいただきました。◇

## 武蔵村山市田口窯について

—近現代の土器生産に関する考古学的民俗学的調査—

小川 望・両角まり

(小平市教育委員会・日本考古学協会会員)

### はじめに

土器の中でも、植木鉢や焙烙はわれわれの日常生活の中で細々ながらその位置を占めているのに対し、火鉢は各種の暖房器具の発達の結果、われわれの前からその姿を消し去ってしまっている。しかし火鉢は植木鉢や焙烙、かわらけや灯火具とともに、江戸の遺跡を発掘すると必ずといっていいほど出土する器種である。したがって、近世における火鉢は江戸市中やその周辺で盛んに生産されていた江戸在地系土器の基幹器種の一つであったことは想像に難くない。

私たちは多摩地域で戦前まで火鉢類の生産を行っていた土器生産者について調査する機会を得たが、今年その正式の報告書(武蔵村山市史編集委員会2000)が公になったのでここに紹介することとしたい。

なお調査の結果は多岐にわたるため、ここでは主に土器生産に使用された窯跡の発掘調査と出土遺物、関連資料の考古学的、民俗(民具)学的調査を中心に報告する。地理的歴史的環境はじめ、調査結果の詳細については報告書を参照願いたい。

### 1. 調査の概要

#### ①目的と方法

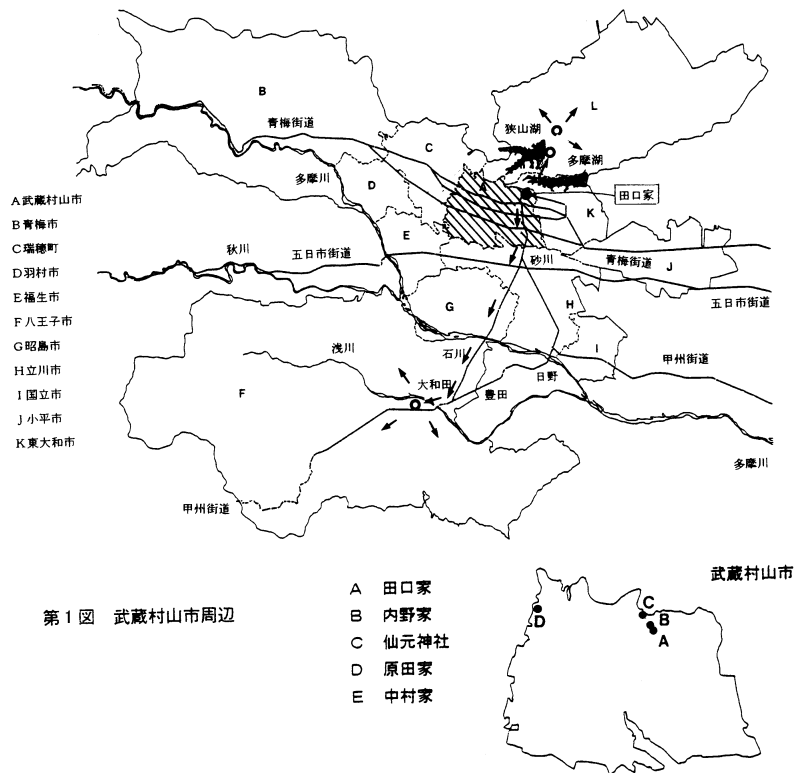
今回の調査は、武蔵村山市の歴史民俗資料館に所蔵されていた在地の土器生産に関する道具や製品を、市史編纂事業の一環として公にすることをきっかけとしている。そして「考古学的方法による地域史研究・叙述のあり方を追究する」という問題意識のもと、これを寄贈した田口家および同家の周辺地域、さらには市域の枠を越えた範囲に対する一連の調査が企画されていった。

具体的には土器生産者田口家の当主〔調査時〕の故・田口忠太郎氏(明治42年(1909)生まれ)および田口家周辺に対する聞き取り調査という民俗学的調査、上記歴史民俗資料館

所蔵資料および田口家に伝わる製品や道具、田口家周辺や武蔵村山市周辺市所蔵資料という伝世資料に対する**民具学的調査**、そして田口家の敷地内にかつて存在したと伝えられる土器焼成窯に対する発掘調査および出土遺物の検討という**考古学的調査**である。(なお土器生産用具に関する参考資料として、これに加え國學院大學考古博物館所蔵資料の調査も行っている。)

## ②田口窯の概要

田口窯は東京都武蔵村山市中藤谷津に所在した「ヒバチヤ」田口家の窯に対する仮称である。屋号はその家の職業や先祖名、地理的位置などに基づいて付与された通り名であるが、この田口家の「ヒバチヤ」も、かつて火鉢類を中心とする土器を作っていたことに因んで名づけられたものである。忠太郎氏からの聞き取り調査によれば、田口家はもともと農家であり、ぎとして、冬の農閑期に素焼きの火鉢や焙烙、甕などの土器を注文に応じて生産、販売していたという。その創業の時期は明らかでなく、どのような技術的系譜をもっていたかなどについては不明であるが、土器作りは忠太郎氏の父親である幾次郎氏まで三代にわたっておこなわれていたとのことで、近世末にまで遡るものと考えられる。土器作りは昭和10年(1935)ころからの燃料の不足、忠太郎氏の軍需工場への徴用から、父親の代で廃業を余儀なくされている。





武蔵村山市内遺跡一覧表

NO	遺跡名	種別	時代	NO	遺跡名	種別	時代	NO	遺跡名	種別	時代
1	稲荷塚	包蔵地	縄文中期・平安	14	赤塚第1	黒塚跡	平安	27	残堀	包蔵地	縄文前期
2	細田第1	包蔵地	縄文中期	15	赤塚第2	包蔵地	縄文中期・平安	28	残堀第1	包蔵地	縄文革新期
3	細田第2	包蔵地	縄文早期・縄文中期	16	赤塚第3	黒塚跡	生産跡 平安	29	中久保	包蔵地	縄文革新期～中期
4	野山第1	包蔵地	縄文・古墳	17	赤塚第4	包蔵地	縄文・古墳	30	アタゴ松	包蔵地	縄文・古墳
5	野山第2	包蔵地	古墳	18	鷹敷山	黒塚跡	縄文～平安	31	御伊勢野	包蔵地	縄文中期
6	野山第3	包蔵地	縄文前期～縄文後期	19	入り	包蔵地	縄文中期	32	御伊勢野	野営地	縄文中期
7	野山第4	黒塚跡	縄文前期～後期・古墳	20	熊野神社	包蔵地	縄文	33	久保	包蔵地	旧石器・縄文中期
8	野山第5	黒塚跡	縄文革新期～後期・古墳	21	谷ツ	包蔵地	縄文中期	34	念仏塚第1	包蔵地	縄文中期
9	野山第6	包蔵地	古墳	22	緑ヶ谷戸	包蔵地	縄文中期・平安	35	念仏塚第2	包蔵地	縄文革新期
10	滝ノ入	黒塚跡	縄文・古墳	23	堂山	包蔵地	縄文中期・平安	36	オカネ塚	包蔵地	縄文
11	八幡山	包蔵地	縄文革新期～中期	24	向山	包蔵地	縄文中期	A	大スカリ地区防空壕	現代	
12	七所神社	包蔵地	古墳	25	中道	包蔵地	古墳				
13	宮神山	黒塚跡	旧石器～平安	26	フジ塚	包蔵地	縄文中期・古墳				

第2図 田口家および周辺の遺跡（田口家は■の示す位置）

## 2. 民俗学的調査（田口忠太郎氏および田口家近隣における聞き取り調査）

忠太郎氏は、昭和10年代前半（1930年代後半）頃まで、父幾次郎の土器製作を手伝っていたという。また、近隣において聞き取り行った方々の中には、忠太郎氏とともに土器製作を見たり、手伝ったりしたことのある方もいた。調査では、様々な興味深い情報が得られたが、ここでは、土器生産および販売にかかわる情報のみを記載することとする。

①粘土は家の裏で採取した粘土質の赤土を使用した。

②ロクロは2基で、手回しの左回り。

③製品は、ハタオリヒバチ・ネコヒバチ・ヒケシツボ・カメ・ウエキバチ・ホウロク・ヨウサンヒバチの風口・ヘツツイのサナなど。忠太郎氏とともに土器製作を手伝ったことのある渡辺武男氏（明治41（1908）年生）の記憶では、ホウロクは作っていないとのことである。

④ヒケシツボはかぶせ蓋タイプのを多く作ったが、おとし蓋タイプのものも作ったことがある。

⑤窯は庭先にあり、焚き口は北、製品を入れる口は南、脇はあいていなかった。

⑥焼成は、午後4時頃から12時頃まで、火を落として一晩おき、翌朝9時ぐらいから取り出した。

⑦出荷はさらに翌日で、出荷先は地元（武蔵村山）・八王子・立川・日野・青梅・田無・所沢など。八王子方面へは、砂川→築地の渡し→粟ノ須→石川→大和田→八日町というルート、所沢方面へは、横田→現在の（山口）貯水池→岩崎村→所沢というルートで行った。

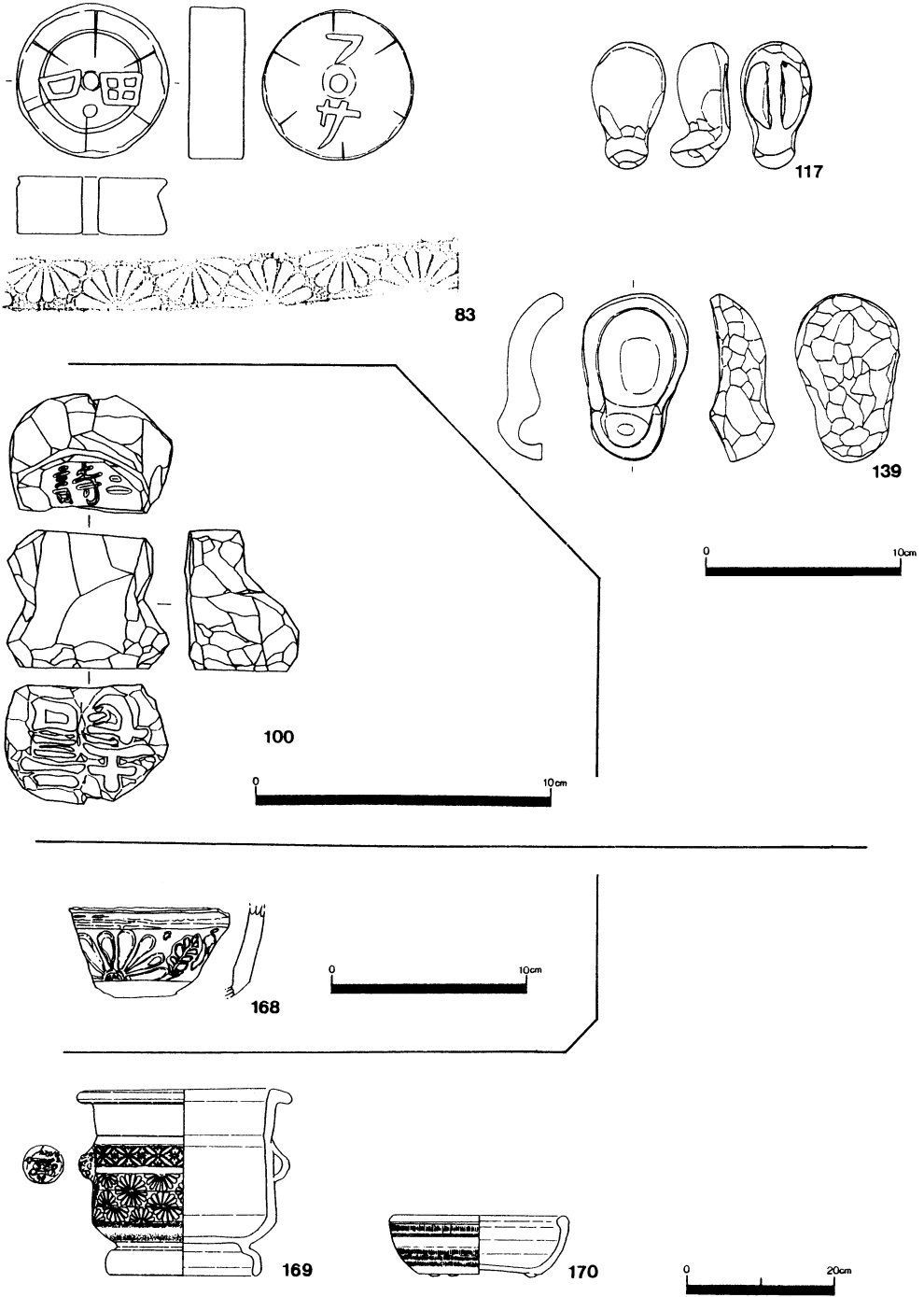
⑧八王子では瀬戸物屋の「油屋」（所在地不明）や「木下商店」（八日町所在）、所沢では行商人の北田喜三郎氏（小手指在住）などに卸していた。なお、所沢市下山口の中村家には、北田喜三郎氏から購入したという、田口家製品のハタヒバチが残っている。

## 3. 民具学的調査

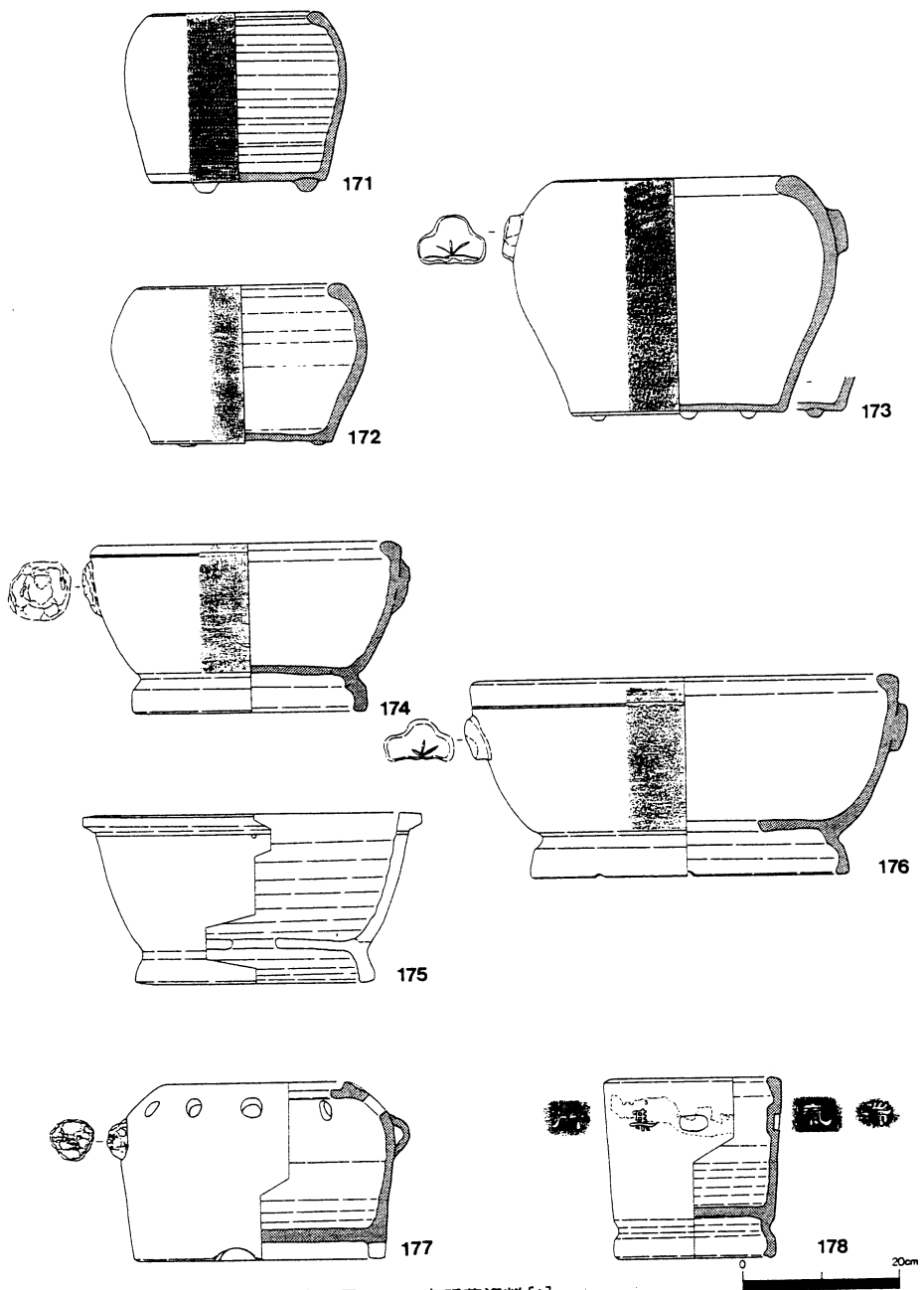
①歴史民俗資料館所蔵資料—道具類が中心。回転印刻に用いるローラー、スタンプ、把手や脚などの部品の型（原型および外型）、人形の型（外型）など。製品としては、火鉢類の胴部破片、把手付火鉢、火鉢が各1点ずつ採取されている。うち、胴部破片に回転印刻された文様については、パターン的一致するローラーが確認されたが、把手付火鉢に回転印刻された文様についてはパターンが一致するローラーは確認されなかった。

②田口家伝世資料—製品が中心。火消壺、火消壺の蓋、養蚕火鉢、置炬燵、植木鉢、甕、置竈、焜炉、焙烙の外型、さな、羽釜など。火消壺蓋については、かぶせ蓋タイプのものとおとし蓋タイプのものの両方が採取されている。

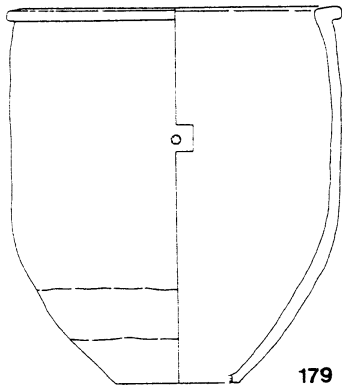
③周辺市町村所蔵資料—火鉢・焜炉類を中心とした製品類。上記の器種以外には、角火鉢、座敷火鉢、行火、坊主、風口、蒸竈、練炭おこしなど。



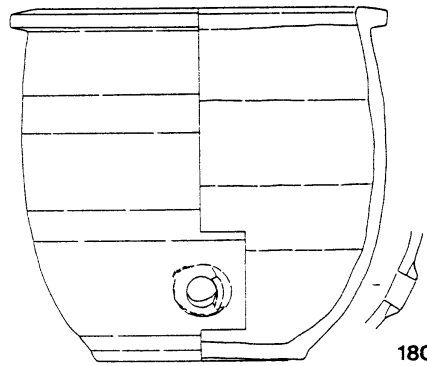
第3圖 武藏村山市立歴史民俗資料館所蔵資料



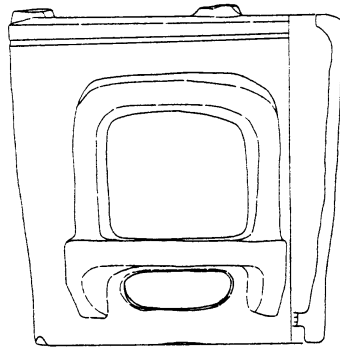
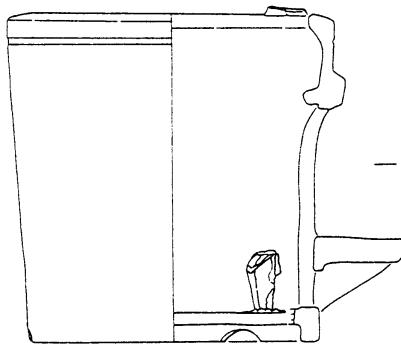
第4図 田口家所蔵資料[1]



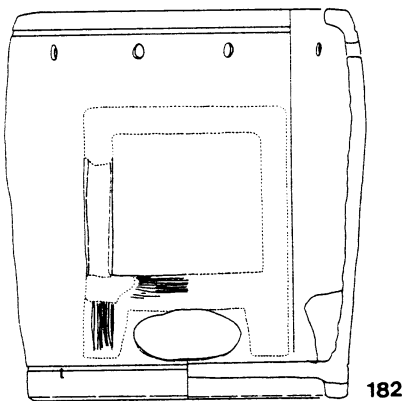
179



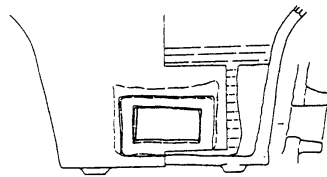
180



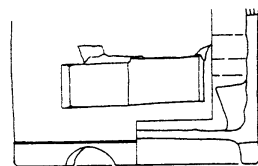
181



182



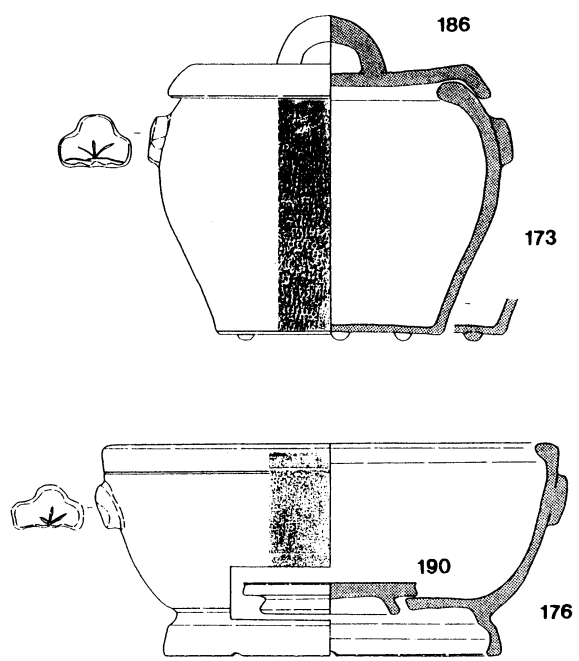
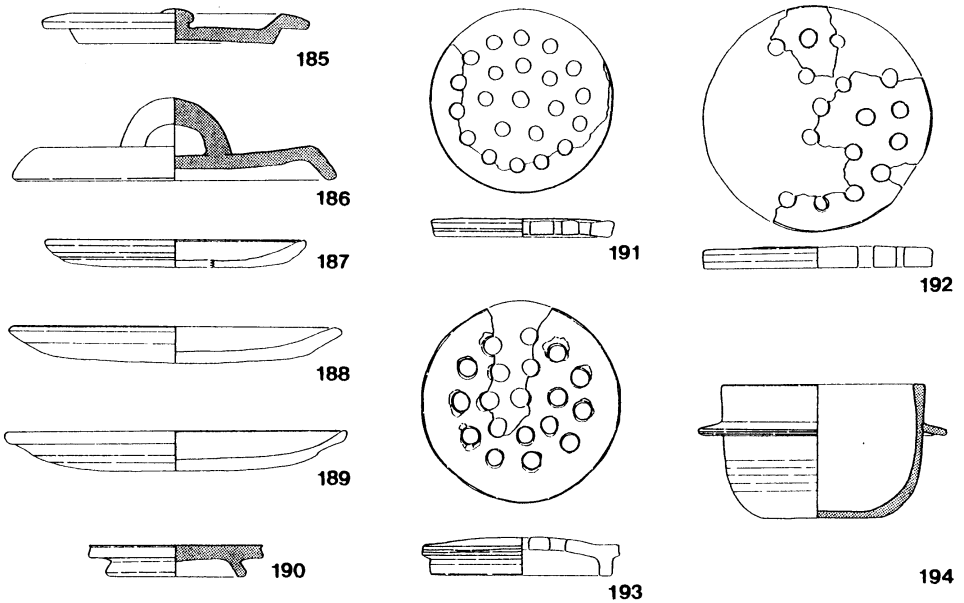
183



184



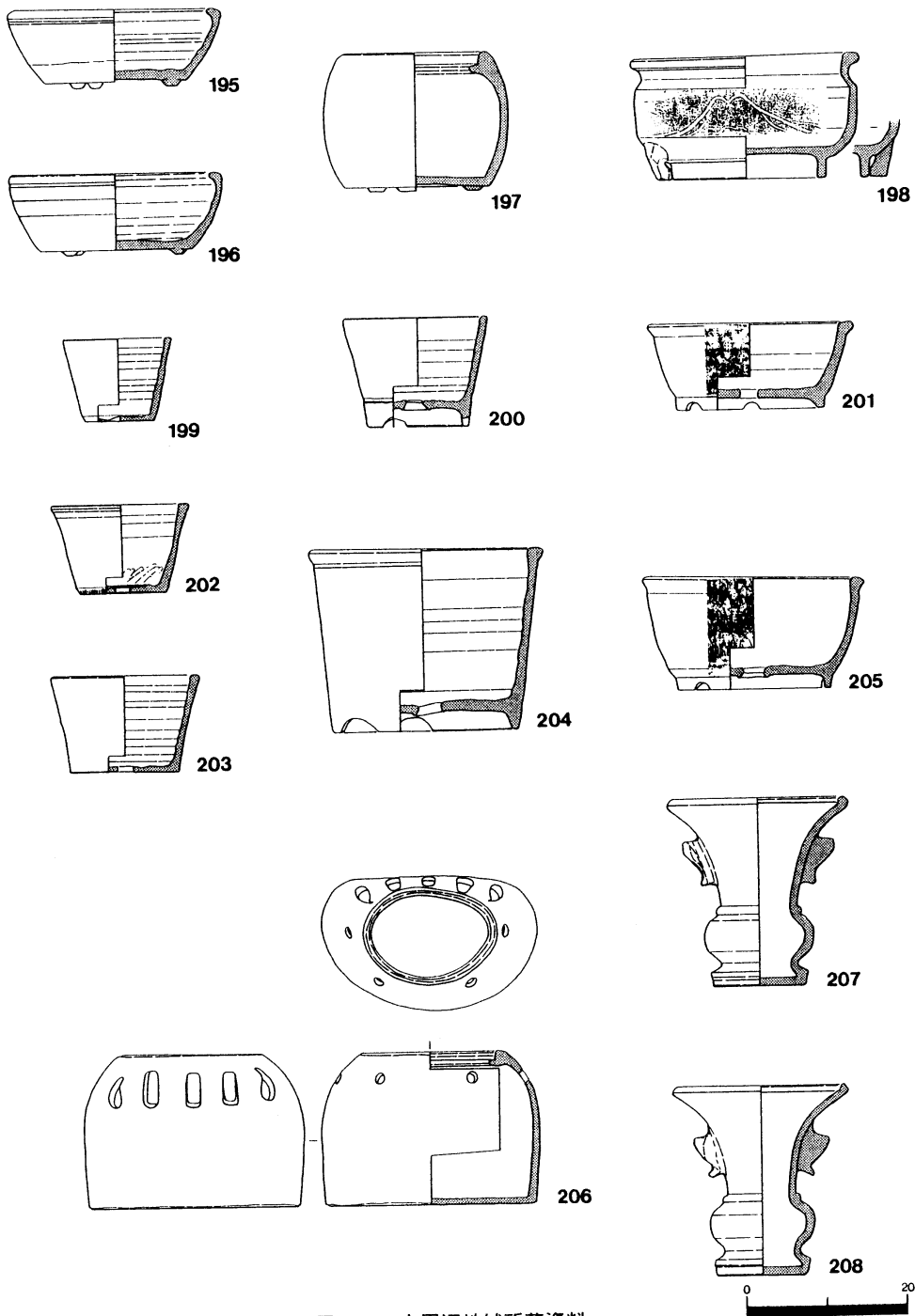
第5図 田口家所蔵資料[2]



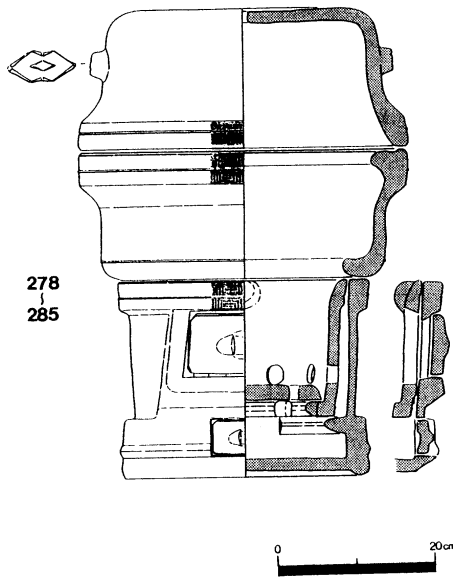
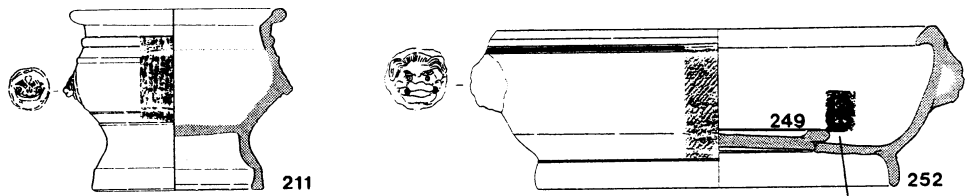
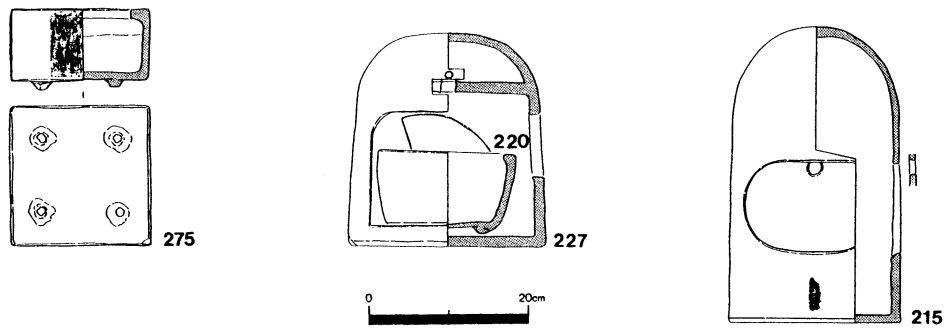
第6図 田口家所蔵資料[3]







第7図 田口家周辺地域所蔵資料



第 8 図 周辺地域採集の資料

## 4. 田口窯の発掘調査

### ①調査の経過

調査は平成8年(1996)9月6日～9日まで実施した。聞き取りによって窯が存在したと伝えられる田口家の庭の築山を南北に縦断するように幅50cm、長さ5mのトレンチを設定し、6日～8日にかけて植栽の移植などを行った上で掘り下げを行った。深さでは何らかの施設の床面にあたると思われる硬く締まった層が検出されたため、これを深度の限界として掘り進め、その両端でこれを切る遺構を検出している。長軸方向では、トレンチ北側に白色粘土の層が検出されたため、北に50cm拡張した。またトレンチ南側では焼土層が検出された上、比較的大形の浅い落ち込みを検出したため、長さ75cm拡張した上、幅も40cm拡張した。最終日の9日には埋め戻しを行って、現地での調査を終了した。

### ②セクションと出土遺構

セクション全体の南側半分以上にわたって、硬く締まった層の上位には粘土層と焼土層の互層が検出された。この焼土層の互層は薄いレンズ状を示し、北側は白色粘土層で終わるが、この粘土層はトレンチ北端でP3に切られている。また南端でP1に、中央でP2に切れ、これらの上に整地層と盛土層と思われる堆積が載る。盛土層の中には上に磁器の碗を置いたような状態で鉄板が検出され、鉄板の置かれた部分が一時的に地表面であった可能性が示唆される。P1、P3とも完掘できなかったため規模は確認されていない。また、P2は直径40cm、深さ20cmほどの小さな土坑である。いずれのピットも伴う遺物はなく、性格など明らかでない。

### ③出土遺物

今回の発掘により出土した遺物は、総数198点に上り、陶磁器、金属、ガラス製品なども含まれている。詳細は報告書に譲り、ここでは製品と考えられる主な土器について略述する。

i) 轆の羽口―瓦質のものが4点出土した。いずれも破片で、同一個体と確認できるものもなかった。遺跡で通例検出されるものと異なり、未使用であることから、製品と考えられる。

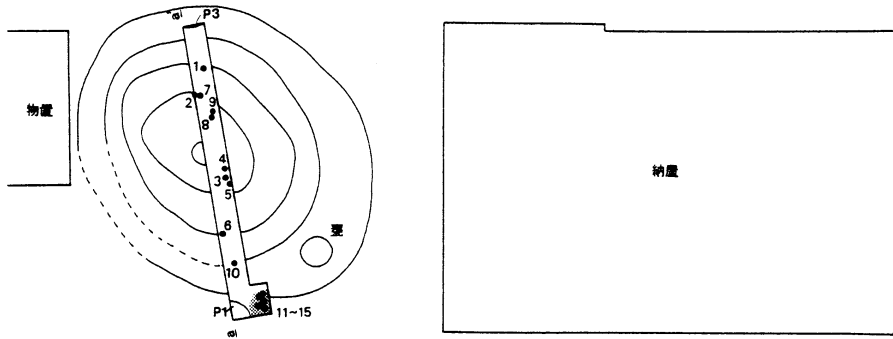
ii) ローラー―1点のみの出土である。瓦質で、側面(印刻面)は細かい格子である。歴史民俗資料館所蔵資料に見られるような人名等の刻書は認められなかった。

iii) 鉢類―火鉢や置竈、火消壺、植木鉢と考えられる口縁、胴部、底部の破片が多数検出されたが完形のものはなく、器形が完全に復元できるものはなかった。瓦質および土師質がある。

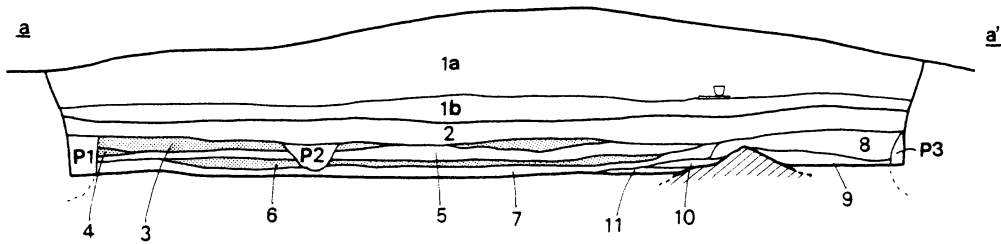
iv) その他―火消壺の蓋や七輪の部分品である五徳、風口、さな(目皿)のほか竈に用いられる敷輪などが数点ずつ検出された。

これらは、いずれも田口家の製品と考えられるが、1点の煉瓦を除き窯体を構成していたと考えられるものはなかった。ただし、上述した轆の羽口と思われる製品は、福島県丈六窯の報告などを参照すると、窯体に用いられた部材とも考えられ、今後の検討を要

母屋玄關



発掘調査トレンチ位置および遺物出土位置

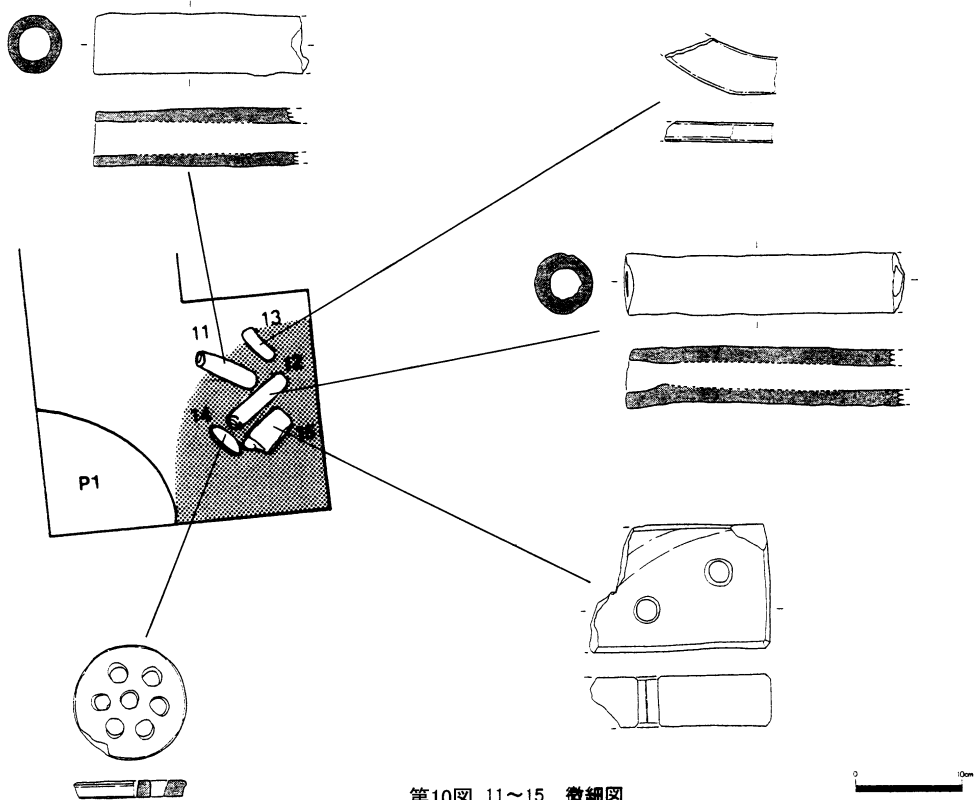


第9図 トレンチ位置およびトレンチ西壁セクション

土層説明

層位	色調等	内容物等
1a層	褐色土層	木根を多く含み、ボソボソしている。盛土層。
1b層	褐色土層	粘土ブロック、砂利、小れきを多く含む。盛土層。
2層	黒色土層	粘性強く、しまりあり。部分的に粘土ブロック、焼土粒を少量含む。
3層	焼土層	上面はよく焼けしまっており、窯体の一部と思われる焼け粘土ブロックを含む。
4層	焼土層	ほぼ純粋な焼土層で、よく焼けしまっている。
5層	青灰色粘土層	しまり強く、部分的にやや黒味を帯びる。
6層	焼土層	3層・4層よりさらに焼けしまっている。部分的に黄褐色粘土ブロックを含む。
7層	黒褐色粘土層	しまり強く、かたい。スレート状に薄く剥がれる。
8層	白色粘土層	しまり強く、上面はかたくバリバリになっている。黄褐色粘土ブロックと白色粘土ブロックが混在する。
9層	黒褐色土層	2層に類似している。少量の白色粘土ブロックを含む。
10層	炭化物層	材と思われる炭化物の層。
11層	黄褐色粘土層	
P1	黒色土層	粘土ブロックを含み、ボソボソしている。
P2	黒色土層	粘土ブロックを含み、ややボソボソしている。
P3	黒色土層	粘土ブロックを含み、ボソボソしている。

するものではある。



第10図 11～15 微細図

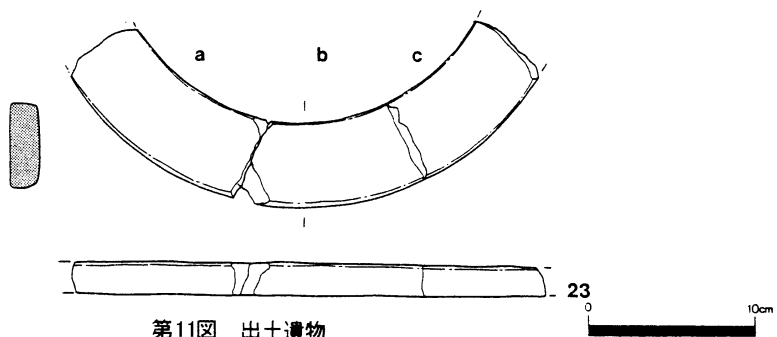
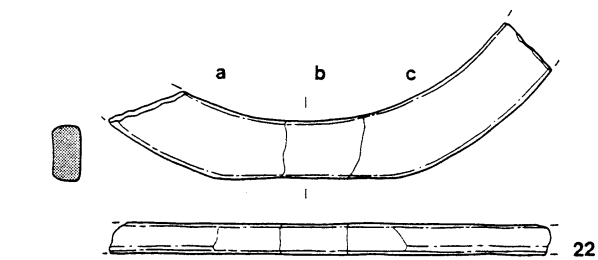
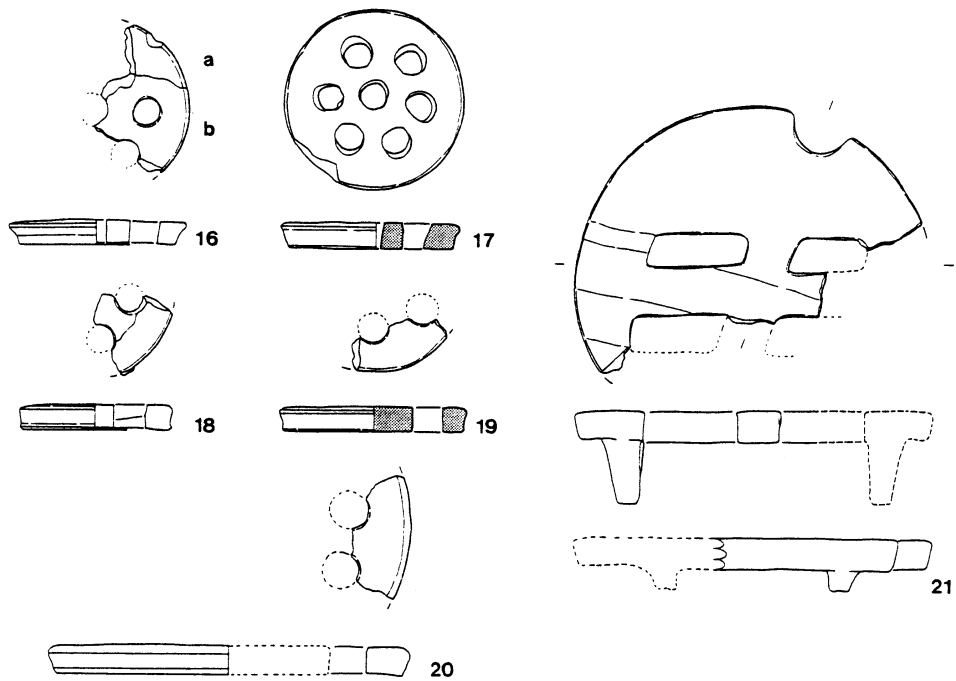
伝窯跡地点発掘調査点取遺物一覧

資料No.	出土層位	材質	種類	遺存状態	出土レベル
1	2層	瓦質	火鉢	口縁	-180.5
2	1a層	磁器	碗	完形	-161.0
3	2層	磁器	仕切皿	約1/3	-174.8
4	2層	レンガ	レンガ	破片	-175.4
5	2層	土師質	風呂	破片	-172.0
6	3層	土師質	人形	破片	-191.0
7	2層	瓦質	火消壺	胴部	-179.0
8	3層	瓦質	羽口		-189.7
9	3層	瓦質	羽口		-194.8
10	3層	土師質	ローラー	完形	-209.5
11	7層	瓦質	羽口		-213.5
12	7層	瓦質	羽口		-205.0
13	7層	瓦質	リング		-218.5
14	7層	瓦質	きな	完形	-205.0
15	7層	レンガ	レンガ		-207.0

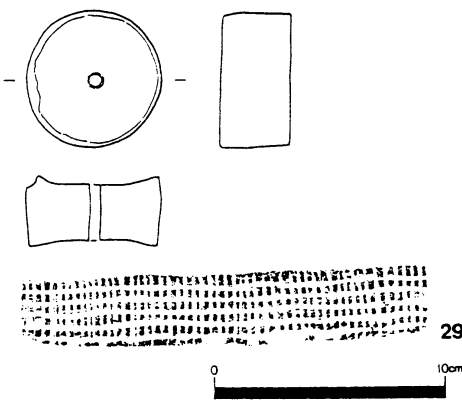
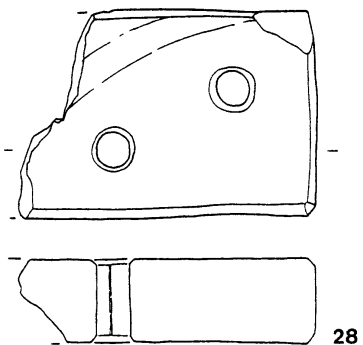
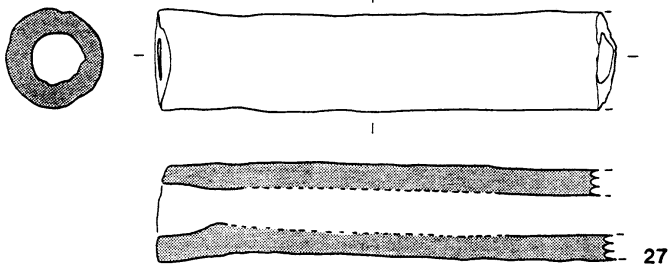
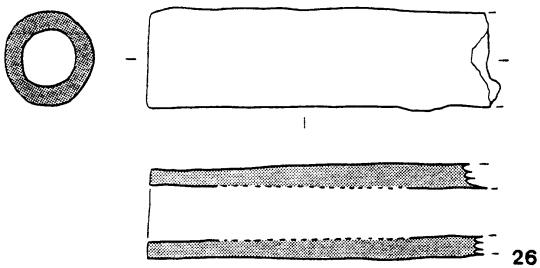
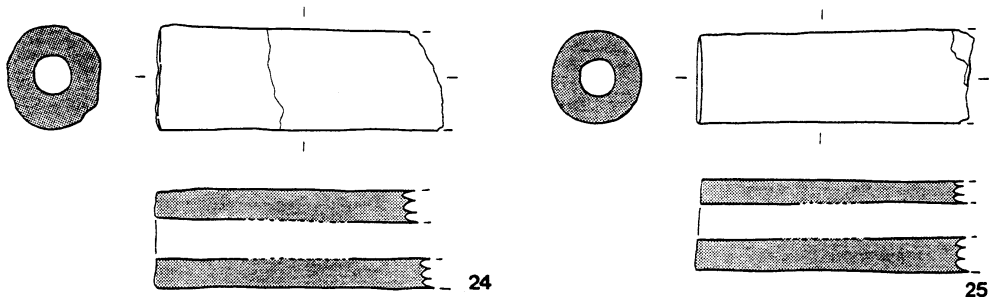
## 5. 分析と考察

### 1) 民具学的調査の成果

田口家および近隣で採取された製品と周辺地域資料とを、成形技術や装飾（回転印刻やスタンプ印刻）その他の刻印などの面から比較したところ、いくつかの成果がみられた。①田口家の周辺で採取された植木鉢の回転印刻文と小平市所蔵の把手付火鉢の回転印刻文のパターンが一致した。植木鉢は、田口家の製品であるとの聞き取りがあることから、小平市所蔵の把手付火鉢も田口家の製品である可能性が高い。



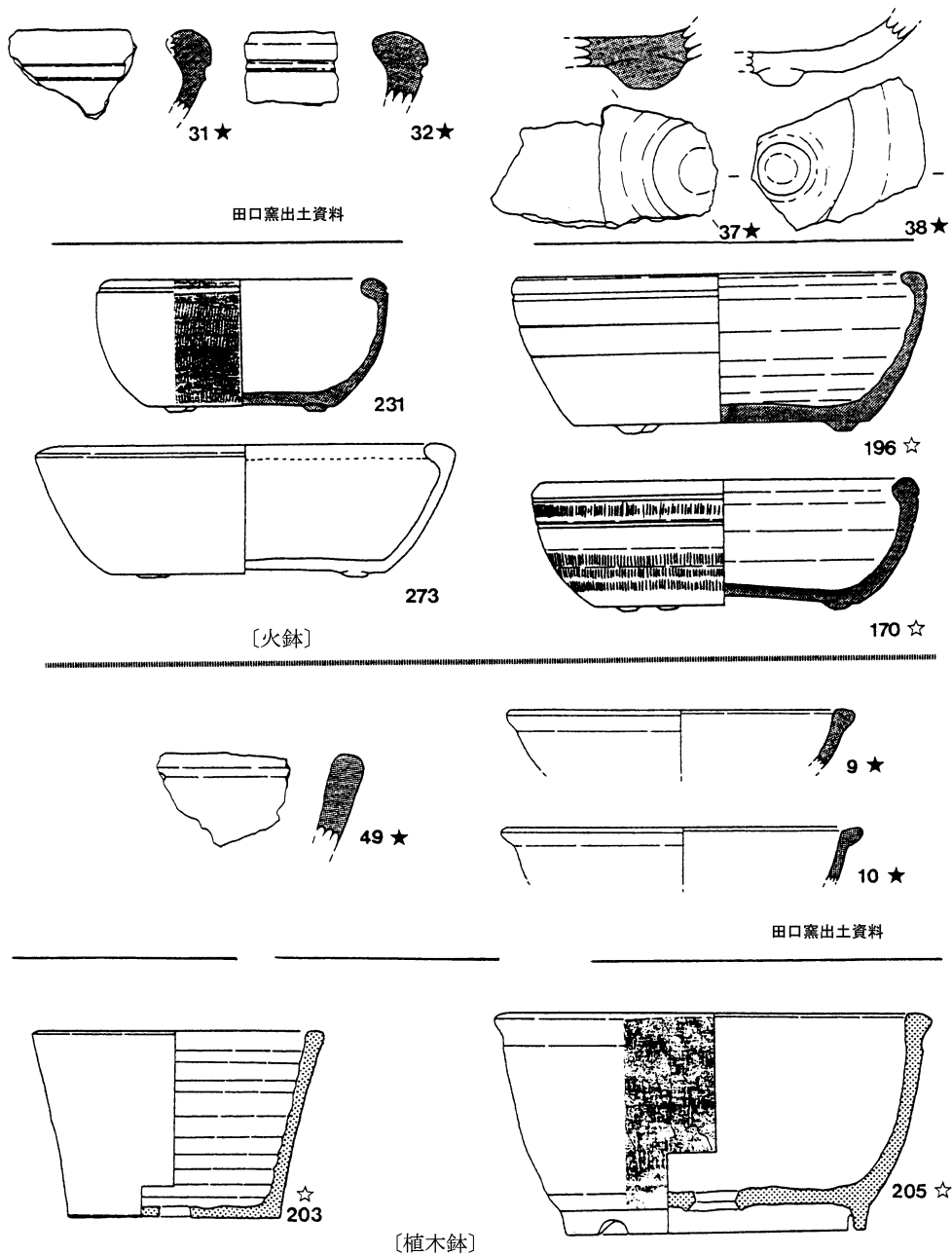
第11図 出土遺物



第12図 出土遺物

0 10cm

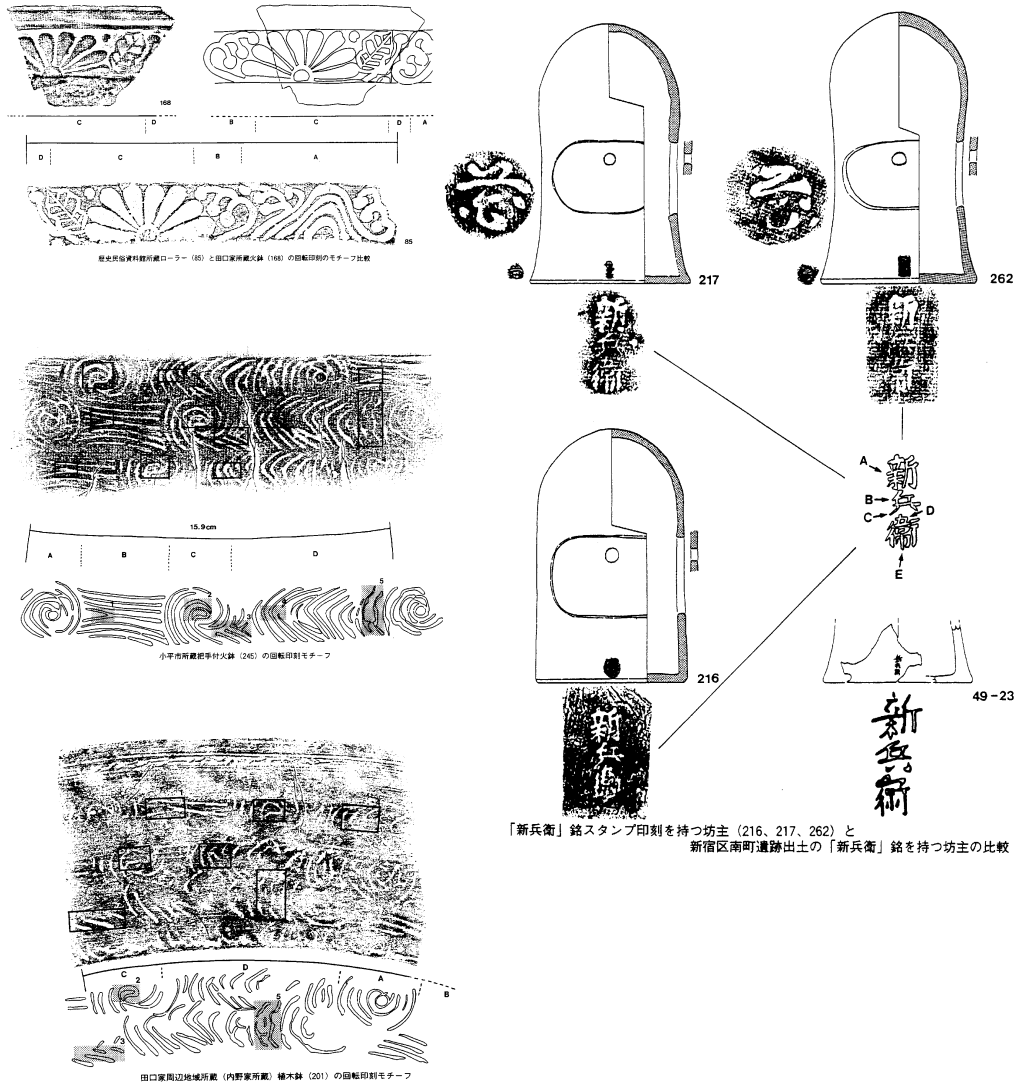
0 10cm



第13図 発掘資料と民具資料の比較

②八王子市・国立市所蔵の「新兵衛」銘の刻印を持つ坊主と同様のものの底部破片が、新宿区南町遺跡において出土していることが確認された。近世江戸地域の遺跡で出土した形状不明、産地不明の瓦質・土師質土器の中に、近現代の所産のものが含まれている可能性が指摘できる。





第14図 民具資料等の回転印刻、刻印の比較

③「武州松山町／正横明製陶所」の刻印がみられるため、現埼玉県東松山市内で製造されたと推測された一連の養蚕火鉢については、後日、横明製陶所の存在が確認されたこと、「マツヤマヒバチ」と称され、東松山の特産であったことなどがわかってきた。

## 2) 考古学的調査の成果

①トレンチ調査であったこともあって、発掘調査の結果得られた知見や検出された遺構は、直接「土器窯」の存在を示すものではなかったが、焼土層や未使用品を含めた製品の破片が多数検出されたことは、少なくともごく近くに窯が存在したことをうかがわせるものであった。

②出土遺物の破片は、田口家やその周辺における伝世品や、歴史民俗資料館所蔵資料な

どと比較すると、同一の技術的系統の製品であることが強く示唆され、田口家による土器生産の聞き書きを裏付けるものとなった。また忠太郎氏からの聞き取りには現われなかった、焜炉の部分品や轆の羽口と思われる製品などが確認された一方、焙烙は破片すら検出されなかったなど、製品の器種については、聞き取りとの間での齟齬も認められた。

## まとめ

近世を対象とする考古学的調査が都心部の再開発の動きの中で急速に発達してきた結果として、かつての御府内における膨大な調査事例の蓄積を生み出し、その周縁部との資料的格差を生じている。こうした資料的格差はまた、近世と近代以降という時期的な位置関係の中でも生じており、都心部－多摩地域、近世－近・現代という二重の格差の中で、多摩地域に近年まで存在した土器生産は関心を引きにくいことも事実である。しかし特に小規模な資本の蓄積のもと、小規模な施設で生産された在地球器のありかたを、近世江戸における遺構や文献の形で捉えることはほとんど困難であり、多摩地域に近・現代にまで残っていた在地球器生産者から直接の聞き取りを含めた今回の多角的な調査は貴重な資料とすべきものであろう。

窯跡の調査は、十分な成果を上げ得たとは言いが出土遺物との対比という意味では、例えば透明釉の製品がないこと、カワラケを含め灯火具に関する製品が欠如しているなどの差異が認められた一方、口縁や三足の様相など火鉢類の形態には共通する部分も多く認められた。今後機会を得てさらに広い範囲を対象とした調査を行うことができれば、さらに多くの成果をもたらすものとなることと思う。

以上、ごく簡略ではあるが武蔵村山市における田口窯の調査について報告した。在地球器の生産に関しては、江戸の周辺地域にあってすらその残照も消滅しようとしている現在、そのわずかな手がかりを記録にとどめることができたことは幸いであったといわざるを得ない。今回の調査、報告にご協力いただいた田口忠太郎氏、武蔵村山市をはじめとする皆様に、感謝申し上げます次第である。

## <参考文献>

武蔵村山市史編集委員会2000『武蔵村山市中藤 田口窯調査報告書』〔市史調査報告書第9集〕

内野 正2000「近世末から近代における多摩地域の土器生産～武蔵村山市「ヒバチヤ」田口家の調査を中心として～」『埋もれた多摩の産業遺産』〔多摩地域史研究会第10回大会発表要旨〕

小川 望1989「埼玉県深谷市に現存する“大沼焼”」『江戸在地球器研究会通信』11

小川 望1993「土製ホウロクの製作技法とその伝統－埼玉県深谷市の大沼焼を中心に－」『食生活と民具』〔日本民具学会論集⑦〕

宮沢 聡・小林謙一 1988「現存する今戸焼職人に関する調査」『江戸在地球器研究会通信』3

◎江戸遺跡研究会編 「江戸文化の考古学」 出版のお知らせ

江戸遺跡研究会では第5回大会「考古学と江戸文化」の成果をまとめた本として「江戸文化の考古学」を吉川弘文館より出版いたしました。

内容

- ・山村博美「江戸時代の化粧」
- ・市田京子「江戸時代の下駄」
- ・島崎とみ子「江戸時代の料理と器具」
- ・堀内秀樹「考古資料からみた江戸時代の料理と器具」
- ・長佐古真也「日常茶飯事のこと」
- ・菅間誠之助「江戸の酒」
- ・成瀬晃司「江戸における日本酒流通と飲酒習慣の変遷」
- ・谷田有史「江戸時代のたばこ」
- ・小川望「出土遺物からみる江戸の「タバコ」」
- ・小林克「あかりの道具研究の方向」
- ・笹尾局之「江戸時代のあかり」
- ・小林謙一「暖房具に見る考古資料と民具資料の関係」
- ・米川幸子「民具に見る多摩の暖房具」
- ・増尾富房「江戸時代の銭貨・寛永通宝」
- ・北原直喜「今戸人形論」
- ・安芸毬子「掘り出された人形」

定価は5,800円です。

第78回例会のご案内

日 時：2000年11月22日（水）18:30～

演 者：有富由紀子氏

内 容：「妙法寺祖師堂床下の経塚  
— 経石からみた近世信仰形態 —」

会 場：江戸東京博物館 学習室

交 通：JR総武線両国駅西口改札 徒歩3分

問合せ：江戸東京博物館  
03-3626-9916（小林・松崎）  
東京大学埋蔵文化財調査室  
03-5452-5103（寺島・堀内・成瀬）  
江戸遺跡研究会公式サイト  
<http://www.ao.jpn.org/edo/>



【編集後記】第78号をお届けします。発送が遅れたこととお詫び申し上げます。次回の例会は1週間遅れて11月22日に日時が変更になっています。ご注意ください。

最近、新聞紙上を騒がせている捏造事件は、われわれ考古学を勉強する者にとっては大変ショックであり、私自身も憤りを感じています。時間が風化させるのではなく、今後、私たち自身の努力から考古学全体の信頼を回復させることが望まれます。（ほ）